

楽府詩人元稹の研究

長谷川, 真史

<https://doi.org/10.15017/1500458>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	長谷川 真史			
論文名	楽府詩人元稹の研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	静永 健
	副査	九州大学	教授	柴田 篤
	副査	九州大学	教授	辛島 正雄
	副査	九州大学	准教授	南澤 良彦

論文審査の結果の要旨

本論文は、九世紀の中国、すなわち文学史において中唐と呼ばれる時期に活躍した詩人元稹(779~846)とその作品について、これをさまざまな角度から考察した研究成果である。

まず序論において日本と中国において従来取り上げられてきた元稹に関する研究課題が検証されているが、ここで明らかになることとして、その研究分野による異なり(詩歌研究/小説研究/文学史研究)が、元稹という一人の人物を正しく捉えようとするに当たって極めて大きなさまたげとなっていることが挙げられている。つまり、詩人としての元稹は、李紳や白居易など同時代の著名な詩人たちと交友関係があり、唱和詩やあるいは「次韻詩」などといった特徴的な作詩技法の完成者として評価が高い。だが一方、唐代に流行した「伝奇」と呼ばれる小説において、彼はその自伝的恋愛小説とも言える作品の作者としても著名であり、小説「鶯鶯伝」は、後に「西廂記」と改編され、語り物文芸や舞台演劇の台本などにさまざまに用いられるようになってゆく。これが元稹についての研究史上における二つめの顔である。更にもう一つ、中国の文学史研究において元稹の名が登場するのが、盛唐の詩人杜甫(712~770)を発見し、現在に残される最も早い杜甫に関する批評を記したことである。従来の元稹についての研究は、日本と中国を問わずおよそこの三つの事柄が、それぞれには無関係なまま、随意に選び取られ、おのおの全く没交渉のままで研究が展開されてきたのである。しかし、本論文においては、これら三つの異なる位相を繋ぎあわせ、一つの確固たる元稹像を打ち立てようと試みている。そして、まさにその結論として提出されたのが、標題にいう「楽府詩人」という考え方である。

「楽府」とは、中国漢代に起源を持つ王室における楽曲付き歌辞文芸である。しかし、時代が下るにつれて古代の楽曲(楽器・演奏方法)は失われ、歌詞のみが伝わるものが発生する。すなわち、「楽府」が、歌われるものから、読まれるものへと変質し、その歌詞の物語性に人々の注目が集まるようになるのである。折しも唐代、この歌われぬ「楽府」に注目し、新たな文芸として復興させた人物が盛唐の李白であり、杜甫であった。本論文では、元稹が李白と杜甫に学んだ詩歌として、楽府「将進酒」と虚構性の強い長篇叙事詩「代曲江老人百韻」とを取り上げる。そして、同じく虚構の物語文芸として伝奇「鶯鶯伝」へと論証が展開されてゆく。また、元稹には漢代以来の伝統的な故事を用いた「古題楽府」と、現代の事件や社会問題を諷詠する「新題楽府」とが存在するが、前者については「董逃行」と「楽府古題の序」を、また後者については玄宗と楊貴妃が逗留したという「連昌宮詞」を取り上げ、その内容を緻密に考察している。その結果、現実と虚構の世界が複

雑に入り組んだ元稹の文学創作のありようが、はじめて明らかとなった。特に連昌宮の故地など、現地調査に基づいた考証は労作というに相応しい。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。